

転生したら英雄女帝

ダークネスムーン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神により特典を貰って転生したはいいが姿が女帝ギルガメツシュとなってしまう元少年は心まで女になってしまった。

迫害を受けたり、気に入った者を集めたらいつの間にか組織ができってしまった。

新たな英雄女帝の物語である。

※残酷な描写は保険です。

目次

プロローグ	1
第1話英雄女帝と赤龍帝	3
第2話ギルガメッシュvsスカサハ	7
第3話英雄女帝、コカビエル(害虫)退治に動く	10
第4話英雄女帝、状況を観察する	13
第5話聖魔剣誕生	15
第6話英雄女帝の圧倒的な勝利	19
第7話英雄女帝、悪魔と接触する	22
第8話英雄女帝、墮天使総督と接触する	25
第9話会谈開始	28
第10話和平	31

プロローグ

1

輝くような金髪の長い髪の毛のロングヘアーに赤い瞳した少女がいる。彼女は元々は違う世界にいた存在であるが死んださいに特典付きで転生した事に対しては彼女は感謝している。特典はギルガメツシユの能力であった為多少のデメリツトは良いと思っていたが

「だが、女帝ギルガメツシユする必要はあつたか!？」

彼女は転生前は男であつたのだ。転生の影響で心まで女になつてるのが質がわるい。そのせいで基本神は嫌いである。因みに彼女はギルガメツシユと名乗っている。認めた者にはギルと呼ばせている

「女帝よ。報告にきました」

「そうか大義である」

ギルは今王座のような場所にいた。そこに黒い髪の毛のロングヘアーの少女が膝を付いていた。

ここはいつの間にかできた組織【秩序の裁定者】コスモスルーラー。迫害を受けたものの保護や戦争などの抑止力を行う組織。大きすぎる戦争は人間界にも多大な被害がでる。種族同士の秩序をもたらす事が目的。必要ならば何でも殺す。

「もつたいなきお言葉！禍カオスブリケードの団のトップは女帝が察していた通りの人物でした！流石は女帝です」

「やはりそうか。あのトカゲもよくあのような場所にこだわるものだな。妾わたしとしては理解できぬがな。報告を続けよ」

ギルは彼女達には禍カオスブリケードの団について調べさせてあつた。「派閥は今のところ二つ存在しています。旧魔王派と呼ばれる前魔王の血族の者達とそれに賛同する者達の様です」

「フハハハハ。愉快だね。負け犬どもはよもやテロリストにまで墮ちたか？自分達の力で無理といつてトカゲを頼るとはな・・・雑種らしい」

彼女の報告を聞くとギルは笑いだした。旧魔王派を見下すように。

「もう一つの派閥は英雄派と呼ばれる英雄の末裔と名乗る者達とそれを指示する人間達のほぼ全員が神セイクリットギア器を宿しています」

「何？妾わたしをさし引き英雄を名乗るだと？身の程知らずの者達がいたものね」

ギルは少し怒っていた。慢心されどあるがギルはそのような不屈き者は始末してやろうと思った。

「全くです。誠に英雄とは英雄女帝ギルガメツシユ様のことです。いかがいたしましたでしょうか？」

「何れ行動も起こすであろう。報告は怠るな！良いな？それと迫害を受けた者達も捨て置くな！」

彼女も賛同しギルは次の命令を出した。

「はー！」

「凜華下がるがよい」

彼女……いや凜華はギルの言うとおりに下がった。

「スカサハよ。妾わたしは出かける」

ギルは視線を後ろに向けて言った。紫色の全身タイトのような姿をしている女スカサハもギル同様転生者である。この組織には転生者もいる。チートを持つているが故に迫害された者もいるからだ。スカサハは【秩序の裁定者コスモスルーラー】の副リーダーである。

「行ってくるが良い。お前のお気に入りなのだからな」

2

ギルは駒王町に来ていた。ギルは時間を見たら丁度13時だった。

茶髪の少年が走ってきた。

「すまん！」

「妾わたしを待たすとはどう言うことかしら？……まあいいわ。いきましょ。イツセー」

茶髪の少年は兵藤一誠ひつよし。赤龍帝を宿す少年である。

第1話英雄女帝と赤龍帝

1

イツセーとギルガメツシュの出会い是一年前に遡る。ギルは気紛れで駒王町に訪れていた。よそ見をしているとギルは誰かに当たった。

「すいません．．．うお」

ふとイツセーをみた。するとギルは気がついた。イツセーの中に眠る神器を。そして自分の胸に視線が行っていることに。

(．．．引き寄せられたのか妾わたしを？もしくは偶然か？だが．．．面白い．．．現赤龍帝気に入ったわよ．．．だけど精神も大きく影響してきているわね)

イツセーのことを面白いと感じた。偶然かもしくは引き寄せたかどうかにしるギルが興じさせるのには十分であった。後半は本音でもある。転生した影響で精神までギルガメツシュになっていた。

「ところでさっきから何故妾わたしの胸ばかりみているのかしら？」
「そこにおっぱいがあるからです」

登山家のような事を言うイツセーにギルは思わず笑いだした。余計に気に入ったギルはイツセーに名を聞いた。

「フ、フハハハハ。面白いわ。初めてよ貴方みたいな人は。名前を聞こうかしら？」

「俺は兵藤一誠。駒王学園に通う高校生だぜ。君は」

「ふむ．．．ギルと名乗っておくわ」
(流石にギルガメツシュは分かるだろう。見たところ迫害は受けてないように見える。無理矢理こちらにふみこませる必要はないだろうが．．．しばらく様子見といこうか)

ギルも無理矢理引き込むつもりはない。それではギルが雑種と呼ぶ質の悪い悪魔と変わらない。

そこでまだ目覚めぬ赤龍帝と英雄女帝はであった。

2

英雄女帝ギルガメツシュは赤龍帝兵藤一誠を気に入っただとは違う

感情を抱いていた。ギルはこの世界で初めて自分を王と扱わない者に触れた影響だろう。

転生者も確かにいるがギルガメツシユのカリスマ性で敬語になったり女帝と呼ぶ。スカサハは例外だが彼女も少なからずギルを王として扱っている。しかしイツセーは知らぬとはいえギルにとって初めて王ではない……女帝ギルガメツシユではなく、人間ギルガメツシユを見てくれてるそう感じたのだ。ギルガメツシユに変化していない部分であった。

しかし久し振りにイツセーと会って感じたことがある。イツセーから人間の気配が無くなってきている事と悪魔の気配がすることだった。(一体誰かは知らぬが。妾^{わたし}のイツセーに手を出すとは余程命が惜しくないらしい。あいつらに調べさせるか)

後にスカサハとこの事で騒動になるのだがそれはまた別の話。

「どうしたんだギル?……遅れたことを怒ってるのか?それは本当にすまん!」

「それはもうよい。あの店に行くぞ」

謝るイツセーにギルはあきれて言った直後ケーキ屋を指差した。イツセーを引っ張り入っていった。

3

店の中に入るとイツセー達は席に座ろうとすると

「……先輩?」

「小猫ちゃん!?!」

イツセーは隣の席にいた塔城小猫がいた。彼女はイツセーと同じ元ソロモン72柱グレモリー家次期当主リアス・グレモリーの眷属である。

ギルは直ぐに正体にきがついた。転生悪魔である事と妖怪の猫又の中でも猫?と呼ばれる上位の猫又である事に。

「イツセーよ。妾《わたし》の目の前で他の雑……女の名前を出すとは何事だ?」

「えーいや、すまん!」

「わかればよい」

「……」

小猫はじつとイツセーとギルを見ているのだが

「……先輩・壺とか売られるかもしれない。気を付けてください」

「小猫ちゃん!? 詐欺に合ってるとかじゃないから!」

小猫は心配そうに言ってきたがイツセーは心外だと言うように返した。

「じゃあ、いくら払ったんですか?」

「小猫ちゃん……小猫ちゃんが俺の事をどう思ってるか分かったよ!」

小猫がイツセーの事をそう言う目で見ていたことに血の涙を流していた。ただ、小猫は選択を誤っていた事に変わりはない。ギルはキレていた。

「おい、雑種。貴様よりもよって妾わたしを詐欺師などと間違えるとは余程命知らずか?」

本気で小猫を肉片一つ残らず攻撃をしようとすると思ッセーは

「ぎ、ギル落ち着いてくれ! 頼む!」

「いかにイツセーの頼みとはいえこの雑種は許しておけぬ」

「そこを……」

約一時間説得にかかった。イツセーが言うことを何でも聞くと言うことで手を打った。

4

「……すみませんでした。イツセー先輩が女の人といるのが信じられなくて」

「そこまで言う!?!」

小猫が言った言葉にイツセーは突っ込みを入れたが小猫は気にしていない。

「ならば仕方ない。特別許そう」

「ちよつと待って! ギルまで!?!」

ギルまであつさり納得したのでイツセーは涙目であった。

「当たり前だ（です）」

「クソー！なんであって間もなく息ぴったりなんだよー！！」

第2話ギルガメツシュ VS スカサハ

1

ギルは部下を使いイツセーについて調べさせた。ギルは結構怒っていた。その為少し不機嫌な日が続いたのだがそこにスカサハがギルの寝室のドアを蹴り破ってきた。

「如何に貴様であっても妾わたしの許可なく入るところか蹴り破るとは何事？」

「オーラ王気を全身から出してた。不機嫌に加えてその不敬さに怒ってた。」

「何事だど？本気でいつてるのか？貴様の私用に彼らを使うとはどう言うことだ!？」

「あやつら全て妾わたしの物。妾わたしの私用使って何が悪い？」

スカサハとギルで口論になった。スカサハはギルがただの私用だけで秩序コスモスルーラーの裁定者を使った事に怒っており、ギルはその組織に属する者は全てギルに全てを捧げている為使っても問題ないと思ってるのだ。

「どうやら力ずくで行くしかない様だな」

「脳筋が！身の程を分かせてやる」

こうして大騒動が起きた。

2

所は変わって戦闘の間に来ていた。ここは本来修行をする者や能力の制御を行う場所。亜空間で行う為壊れても問題なく、死なないように施してある。これはギルとスカサハの計らいであった。流石にあそこでやるのは遠慮した。

「私を倒せる者なら倒して見せる英雄女帝！」

「影の国の女王よ。身の程をしれ！」

スカサハは2本の魔槍ゲイボルクを持っていた。対してギルは手に一本の剣のみ。スカサハは距離を積みようと飛び出す

「天を見上げよ女帝ゲートオブバビロンの財宝」

女帝の財宝とは王の財宝が変化した物である。波紋の中から百を

越えるあらゆる武器がスカサハに向かい射出した。スカサハは即座に防御術式を組みそして同時に自身の速度をあげ叩き落としていたが確実に距離を積めていた。

「この程度か英雄女帝？」

「減らず口を言うな影の女王？」

お互いまだ本気ではない。次は遥かに越える千を越える宝具を射出した。スカサハも流石にダメージを受けたが致命傷は受けていない。スカサハとは言え千を越える宝具は流石に無傷ではすまない。

「刺し穿ち……突き穿つ貫き穿つ死翔の槍」

2本のゲイボルクを使った技。ギルは間合いよけ叩き落としよう一本のゲイボルクをそこに集中し千を越える宝具で対応した。流石のギルも少し焦ったが次の手を用意していた。

「スカサハよ。生き延びるがいい。天地乖離」

「止めてください！最果てにて輝ける槍」

そこで止めに入った黒い髪に赤い瞳の少女がいた。ギルはエアを止め大きく飛び、スカサハも同じく大きくとんだ。ゲイボルクは止まった。

「落ち着いてください。お二人がこれ以上戦えばここもただですみません。それに死なないにしてもただではすみません。どうかお静まりください」

「……その不敬……いや不敬ではないな。妾達思いした行動大義である。助かった。後に褒美をやろう。それと……スカサハよ。すまない。妾としたことが貴様の意見をすっかり聞かなかつた」

冷静になったギルは止めた少女原香織はらかおりに礼を言った。香織は膝をつき頭を下げた。

「勿体なきお言葉」

「いや、女帝よ。私こそ女帝を殺す気でいた。許してほしい」

「許すとも。妾の相手どるのだそれくらいでなければ貴様こそ死んでいたのであろう」

スカサハも頭に血が上っていたが冷静になればこんなことをせず

ともよかったのだ。スカサハは謝罪した。ギルは当然のように許した。

「そうだな。それにしても香織よ。助かった」

香織はギル達と同様に転生者である。迫害を受けた時に救ってくれたギルに忠実を誓っている。

「当然のことをしたまです。失礼します」

スカサハにそういうと去って行った。ギルは上を見た。現在いるメンバーのほとんどがいた。上から様子が見えるようになっていく。

「皆のものもすまなかつた！^{わたし}妾の痴態を見せた」

「私もだ。許してほしい」

頭を下げる二人に慌てるように各々言った。

「頭をお拳げください女帝、スカサハ様」

「そうです。我らこそ止めねばなりませんでした」

こうして大騒動は終結した。因みにこの後香織は地位が上がりナンバー3になった。

第3話英雄女帝、コカビエル（害虫）退治に動く

1

あれから1、2ヶ月が過ぎた。ギルは何度かイツセーにあつたがイツセーが成長している事に気が付いていた。香織がギルにあることを報告しに来ていた。

「女帝、神の子を見張る者の幹部コカビエルと人間が二人駒王町に向かいました。コカビエルは天界から聖剣エクスカリバーを2本盗んだそうです」

「天界の聖剣？・・・ああ、あの贋作か？本来であればあれは一つ残らず妾が破壊するところだがな・・・成る程。薄汚い雑種がなにを考えているか分かった。お前とて気づいていよう？これは妾達が動く物だと」

天界の聖剣エクスカリバーとはアーサー王が使っていた剣ではない。天界側つまりは今では亡き聖書の神ヤハウエが作った贋作。聖剣の因子があれば扱えるようにスペックを落としている為本物のエクスカリバーとは遙かな差がある。

ギルは贋作を好まない為若干不機嫌になったがコカビエルの目的が直ぐに分かった。駒王町にわざわざ逃げた理由や贋作のエクスカリバーをコカビエルが盗む理由はそうはない。贋作のエクスカリバーなどコカビエルにとっては取るに足りない物だ。それをわざわざ危険をおかし盗んだ事を踏まえればコカビエルの目的は明らかだった。

聖剣は天界にとっては重要な物だ。それを盗み出し、駒王町には魔王の妹が二人いる。つまり、コカビエルの目的はかつて起きた三竦みの戦争の再開である。

「はい。確かあそこには女帝の友人がいると聞きました。早急に手を打たせてもらいます」

「いやよい。妾がいく」

「女帝自らですか!?!失礼ながら意見をさせていただきます。我らでは敵わぬとお思いですか!?!」

ギル自ら出ると言ったのだから驚くのも無理はない。戦争を生き抜いたと言っても香織の敵ではない。香織は驚き不敬を承知で言ったがギルは首を横に振った。

「そうではない。これは幾つかの理由がある。心して聞け！そして皆に伝えよ」

「分かりました」

「一つと二つ、これは妾^{わたし}個人の問題があるからな。一つはイツセー……赤龍帝がどのへんまで強くなったのか、二つ目その主は相応しき者なのか。そして三つ目はこれが片付けば恐らく3種族……悪魔、堕天使、天使で和平を結ぶ為に会談を開くだろう。あの雑種を駆除すれば妾^{わたし}も呼ばれる。妾^{わたし}達の組織としての意見を言う事ができる。それに禍^{カオスブリーケード}の団も動くだろう」

「そこまでお考えでしたか！先程の出過ぎた意見謝罪させて貰います」

スカサハに言われた事を検討した結果ある程度は自身でやることにした。ギルは先を見通した結果を告げた。香織は深く頭を下げ謝罪したがギルは気にしてないかのよう

「いや、お前の配慮は中々であったぞ。早急な報告ご苦労であった……ふむ。香織よ。会談の時に妾^{わたし}の護衛として来ぬか？」

「私でよろしいのですか!？」

「ああよい。スカサハは妾^{わたし}がいけない間の事を頼むのでなお前が最適だ。よろしく頼むぞ！」

女帝ギルガメッシュの護衛とは【秩序の裁定者】のメンバーにとって名誉なことであり、決して失敗を許されない任務でもある。

「は!!女帝には誰であろうと指一本触れさせはしません！」

「頼りにしているぞ」

香織の意気込みにギルは微笑み言うと言移した。

2

ハデスの隠れ兜で姿を隠し駒王学園に来た。魔王の妹の様子を見に来ていた。

生徒会室と旧校舎の二つの部屋から悪魔の気配がした。生徒会室

に來ると聖教者がいた。どうやら墮天使と悪魔が手を組まぬように忠告しに來たようだ。

「分かりました。私達に被害が出る可能性がでない限り手を出しません」

そう答えた黒髪の短髪の少女はこの学園では支取蒼那と名乗っているが本名はソーナ・シトリー。現四大魔王の一人セラフォル・レヴィアタンの妹である。

（それにしても、ここに來た理由が悟れぬのかこの聖教者^{雑種}は。そうではなくとも戦力不足に変わりはないが・・・まさか捨て石にする気が？ 理解出来ぬな）

聖教者二人を呆れたように見た。気が付いていない所がため息をつきたい所だった。しかし、ソーナは少なからずその可能性について視野にいれていた。

（あやつは可能性を視野にいれている。中々だな。次は二部屋あつたが大人数がいるところだろうか）

そう思うと近くまで轉移した。

第4話英雄女帝、状況を観察する

1

ギルはオカルト研究部の前に来ていた。ハデスの隠れ兜を被り聖教者が来るのを待っていた。聖教者の二人、青い髪の短髪の少女ゼノヴィア・クアルタと茶髪のツインテールの少女紫藤イリナが来ると気配を消し入った。

中には紅髪のロングヘアーの少女四大魔王の一人。サーゼクス・ルシファアの妹リアス・グレモリーとその眷属がいた。ギルはリアスを眺めた。

（才能事態があるな。スカサハなら育てそうだがな。妥協点ではあるが取り敢えず預けておくか）

ギルは視線は観察し答えを出した。

聖教者の二人はソーナに対して言ったことと同じ内容を話した。

ギルはイツセーの隣にいた金髪のロングヘアーの少女アーシア・アルジエントに目を向けた。ギルは彼女についての報告は受けていた。イツセーの死について調べさせたときにだ。悪魔でも癒してしまった神器持つが故に聖女などともてはやされた彼女は魔女とまで言われた。

（雑種教会に翻弄された女か。時期が合えばわたし妾が元^{わたし}にいたであろうな……さて大体分かった。去ろう）

2

ギルは調べ上げた。聖剣計画も調べたがギルは呆れた言うに

「全く雑種は雑種でも難儀な話よな。あの贗作の為にそこまでするのはな。呆れた者もいたものよ」

ギルは動向を探っていたがどうやら動くときが来たようだ。リアス・グレモリーとその眷属、ソーナ・シトリーとその眷属が駒王学園に集まった。コカビエルが宣戦布告してきたのだ。ソーナ・シトリーとその眷属は結界を張るため動けない。その為実質リアスの眷属のみだ。イリナはコカビエルにやられたが生きてはいる。戦闘には参加できそうにない。ゼノヴィアと聖剣計画唯一の生き残りであり、

リアスの眷属騎士ナイトの木場祐斗きばゆうとはあとで来るだろう。

「女帝、只今参りました」

十数人が現れた。ギルが呼んだのだ。贗作の聖剣エクスカリバーは三竦みの戦いで7本に折れたそのうちの一本は行方不明であり残る聖剣六つが教会の元にあつた。イリナの持つていた擬態エケカリバー！ミミックの聖剣が奪われ、イリナ達と合流する前に奪われた透明エクスカリバートランスベアレンシーの聖剣、教会から盗んだ夢幻エクスカリバーナイトメアの聖剣、天閃エクスカリバートドリイの聖剣が一つの聖剣へとすると余波でこの街が破壊されてしまう。それを防ぐためとギルが戦えば手加減を加えたとしてもソーナの眷属では結界を維持できないと判断したからだ。この十数人は結界の解析、構築、開発等が専門分野である。勿論秩序コスモスルーラーの裁定者の一員である。

「よろしく頼むぞ」

『は!!』

ギルの言葉に一斉に答えた。英雄女帝が戦場へと向かった

第5話聖魔劍誕生

1

リアス達はケルベロスを撃破しコカビエルとフリード・ゼルゼンと研究者のような男ガルパー・ガリレイがいた。祐斗は直撃こそ避けたがコカビエルの攻撃をくらった。ギルはハデスの隠れ兜をとり準備はすでに終わっている。エクスカリバーはどうやら四本が一本になったようだがギルにとって大差はない。贗作は贗作。取るに足らない物である。ギルは祐斗を見てある可能性予想した。神と魔王どちらも死んだ今だからこそできる物。

「少し加勢してやる。天を仰ぎ見よ女帝ゲートオブバビロンの財宝」

コカビエルよりも遙か上空に浮く王座の上に座り宝物庫を開けた。コカビエルの方に集中していた。一瞬でコカビエルが傷だらけになった。

「余計な横やりをいれるなよ雑種」

「貴様何者だ！」

「秩序コスモスルーラーの裁定者のリーダー英雄女帝ギルガメッシュぞ覚えておけ」

「え!?ギルどうして!」

「イツセーよ。説明はあとでしてやる。質問はあとだ」

2

「君に1つ教えてあげよう。君達は聖劍の因子を持ち合わせていなかったのではない。ただ、少なかったただけだ」

「何を、言つて・・・!」

「言葉通りだよ。聖劍を扱うための因子が君たちには不足していた・・・ならば不足している出来損ないはどうすればいい?・・・答えは簡単。因子を抜けばいいんだよ」

ガルパーの説明に祐斗は戸惑っていた。言ってる意味がよくわからないようだった。聖劍計画で行われたことだ。ガルパーは祐斗を含む実験体達の聖劍の因子を抜いたと言ったのだ。

「因子を抜いて、それを集めて結晶化出来れば、聖劍が第三者が扱うことが出来る!たとえば才能がなくてもな!そして私は研究の末、ソレ

を完成させた！だがどうしたものだ!!教会は私を異端者と追放した
挙句、私の研究成果を奪う！」

「だったら、木場達を殺す必要はなかったはずだろ!?因子を抜いて捨
てれば、木場達は……！」

ガルパーのやったことにイツセーは怒って言うがガルパーがなん
でもないかのように。いったって当然のように答えた。

「ははは。何を言っている？貴様たちは実験動物だ。使い終わったモ
ルモットは、殺すに決まっているだろう？」

祐斗はガツクリとしていた。ガルパーは祐斗に青い塊を投げた。

「今、君の足元に落ちているのは君たちから抜き去った因子の残りだ
よ……そんな残り屑、君にあげよう。そんなゴミは私にはもう必
要ない」

「バルパー・ガリレイ！貴方と言う人は何処まで人の命を!」

リアスもガルパーに怒りを向けた。

「僕は、ずっと思っていた……。何で僕が生き残っていたんだろうつ
て……」

涙を流しながら、祐斗は胸に留めてた想いを吐き出した。

「僕は生き残って、それで部長の眷属になって、学校に通えて、友達が
出来て……。僕だけが幸せになっていいのかと考えた……。僕は
復讐者だ……。そして、僕はずっと独りだ!!」

「戯けたことを言う。しっかり耳を傾けよ戦士よ。そして受け入れよ
！」

自分が生き残った事を後悔しているようだった。他の人を生かす
べきだったのではないかとギルは助言を言った。

《貴方一人じゃないよ》

祐斗が拾った青い塊から何人もの人の魂のようなものが出てきた。
龍、墮天使、悪魔、聖剣、英雄女帝この要因重なりあつてできた奇跡。

《泣かないで。どうして一人なんて寂しいことを言うの?》

《死ぬなんて、悲しいよ……》

《君は生きていいんだよ。だって僕達の希望なんだから》

「どう、して……。皆！」

その影は木場を囲むように声を掛ける。

「僕は何も出来なかつた！何も……皆を見捨てて、今は平和に暮らすなんてそんなこと許されるはずがない！」

祐斗は結晶を両手で握り締めて震え泣きながら叫ぶ。

《見捨ててなんかないよ》

《だって君はずっと、僕達のことを想ってくれていた》

《たとえばそれが復讐なんだとしても、君が私たちを忘れた日はなかつた》

《それに……今も涙を流してくれている》

祐斗は何度も何度も涙を拭うも、それは後から後から溢れてくる。

《私達もあなたを大切に想う》

《あなたはひとりじゃない》

《一人の力は弱くても、みんなと一緒になら大丈夫だ》

《だから受け入れよう……》

人影達は祐斗の手に、自らの手を添える。祐斗の手の中の青い結晶を指した。

《歌おう。みんなで歌った歌を……》

祐斗の周りの光から、聖歌のようなものが響く。

《聖剣を受け入れよう》

《神が僕達を見放しても、君には神なんていらぬ》

《君には私達がいる》

《たとえ神が僕達を見ていなくても僕達はきつと……》

【一つだ】

結晶が祐斗の中入っていきした。祐斗は禁バランスブレイカー手へと至った。

「至ったか」

ソードバース、バランスブレイカー、ソードオブビトレイヤー
魔剣創造 禁 手 双覇の聖魔剣へと至った。

「木場！お前の、お前の同士の想いが詰まった剣が、エクスカリバー
なんかに負けやしねえ!!だから勝てよ！ダチ公!!」

「イツセー君……」

イツセーは祐斗の応援をした。イツセーだけではない。

「負けないで下さい！祐斗さん!!」

「やっちゃって下さい……祐斗先輩!」

「祐斗君、負けたらお仕置きですわ」

「祐斗！貴方は私の、グレモリー眷属の『騎士』よ！だから……思いつきやりなさい!!」

イツセーだけではなくリアス眷属皆が応援してきた。

「…はい!」

「その様なこけおどしに、私のエクスカリバーが負けるとでも？フ
リード!」

「あいあいさー!」

聖剣と聖魔剣が始まろうとしていた。

第6話英雄女帝の圧倒的な勝利

1

コカビエルがギルに光の槍を無数に投げてきたがギルはなんでもないかのよう^にに宝具を射出して防いだ。ギルは視線をコカビエルに向けると

「貴様とは良い勝負成りそうだ！さあ、戦闘をしようではないか!!」

「いきがよいな雑種……しかしな勝負とか言ったか？戯け！女帝たる妾^{わたし}が何故貴様と勝負せねばならん。勝負とはな対等な強さもしくはそれに近いこと^でようやくなるもの。貴様と妾^{わたし}が対等^とでも思っただか？」

コカビエルが戦闘を望んだがギルはそもそもコカビエルを駆除しに来たのであつて勝負しに来たのではない。慢心はあるがコカビエルの強さくらい見抜ける。コカビエルは怒狂^{つたか}のように

「貴様!?下等な人間ごときがこの俺を見下すか！」

「当たり前であろう。貴様のような雑種ごとき見下されて当然であろう？」

なおもギルは座^{つた}まま視線だけをコカビエルに向けて答えた。そうしていると祐斗とゼノヴィアがエクスカリバーを折^つっていた。ゼノヴィアは破^壊の聖^剣ではなくデュランダルを持^つっていた。

「ほう、あれは本物だな。そして面白^き物よ。作り物とはいえあれは妾^{わたし}の宝物庫にはないな」

ゼノヴィアの持つ聖剣と祐斗の聖魔剣に興味を向けた。コカビエルは無視されたこと^で怒^つっていたがしばらくすると冷静さを取り戻した。

2

「ば、馬鹿な……そんなことがあり得るわけがない！聖と魔、二つの相反する力が混ざり合おうなどと!!」

バルパーは聖魔剣を見て驚^いていたがバルパーはマッドサイエンティストだが研究者としては優秀^だつただから行き着^いてしまった。「……そ、そうか、わかつたぞ！聖と魔、二つが混ざり合うという

ことは、つまり神が創ったシステムは消失しているということ！つまり魔王だけでなく神も・・・」

バルパーは光の槍と剣に刺されていた。

「・・・雑行き着いてはならぬ答えもあるが、しかし感謝しろよ雑種。妾^{わたし}自らの手で殺された事とそこ折れた贋作ではなく本物の聖剣によつて死んだのだからな」

ガルパーを貫いた剣は確かに聖剣だった。視線をコカビエルに移し

「貴様も知っていたか？知っていてもおかしくはないがな」

「ふん。俺は貴様がよく知っていたと思つたが？」

「妾^{わたし}としては下らん話だ」

ギルは興味も無さそうにしていた。ゼノヴィアは隙だと思つてデュランダルで切りつけようとした。祐斗も同じく聖魔剣で攻撃しようとしたが

「邪魔だ！聖剣使いの娘と聖魔剣使い！」

呆気なく吹き飛ばされた。コカビエルはゼノヴィアを見て言った。

「よく主がいないのに信仰心を持ち続けられるな、聖剣使いよ」

ゼノヴィアはコカビエルの言葉にピクリと肩を動かした。ギル怪訝そうな顔をした。

「おい雑種」

さつき無視したお返しとばかり無視しコカビエルは続けた。

「は既に死んでいるんだよ、当の昔に……………戦争の時に魔王どもと共にな！」

「貴様!?!」

その言葉を聞いて、そこにいる全員が目を見開いた。ギルは咎めるようにコカビエルに言った。

「う、嘘だ！神が死んでいるなど、そんなわけが！」

「いいや、死んでいる・・・その聖魔剣使いが良い証拠だ。本来、聖と魔がまじりあうことはない。そう、神がいればそんなことは起き

ないはずなのにな」

「そんな……なら、神の愛はいつたいどこに……」

アーシアはショックを隠しきれず、膝を付いた。ゼノヴィアは未だに信じられないのか、大きく叫ぶ。

「……だ。……そだ。嘘だっ！そんな事、信じられないっ!!主が、主が死んでいるなどっ!!」

「神の愛なんて存在していないさ。神がいないのだから当たり前だ。それでもそれでもミカエルは良くやっている。神の代わりをして人、天使をまとめ上げているのだから……所詮貴様らが感じる愛など、偽物だ」

「そ、んな……」

ゼノヴィアとアーシアは絶望したかのような顔をしていた。

「下らんな。いようがいまいが関係なからう！貴様らは貴様らだ」

言い終わるとギルは動いた一瞬でコカビエルの背後に回りそしてコカビエルの翼根本から切り裂いた。

「な!?!ぐあああああああ!」

「これで整ったぞ。貴様のような雑種ごときが本来わたし妾の前に立つことすら許されん。見上げよ。女帝ゲートオブバビロンの財宝」

千を越える宝具がコカビエルを襲った。肉片一つ残らなかった。

「さて、イツセーよ。約束通り質問を聞いてやるが明日にすべきだ。ではな」

ギルが去ったあとに十数人が突如現れ全て直し去っていった。

第7話英雄女帝、悪魔と接触する

1

ギルは先日の約束通りに駒王学園に来た。オカルト研究部に直行した。ノックもなく入ると全員……いやイツセー以外のリアスの眷属とソーナの眷属が警戒していた。

「イツセーよ。約束通り来てやったわよ……ところで雑種共警戒せずともよい。まあ妾の眼中^{わたし}にはない安心せよ……む？聖教者よ。悪魔に堕ちたか？仮にも我が財の1つを使う者が簡単に堕ちるものではないは！」

親しげにイツセーに話しかけ視線をゼノヴィアに向けて言った。ゼノヴィアが言っている意味がわからないかのように言った。

「我が……財？」

「デュランダルのことよ。あのエクスカリバー等と名ばかりの贋作とは違いあれは本物よ。我が財の1つ」

『な!?!』

驚愕しているリアス達に向かってギルは呆れたように言った。

「何を驚いている？昨日も言ったであろう。英雄女帝ギルガメツシュだと」

「ギルガメツシュ!?!」

「えつと……すいません部長ギルってそんなに凄い人なんですか？」

イツセーはギルガメツシュの名を聞いてもわからなかったようでありアスに聞くとリアスは答えた。

「ええ！半神半人がかつて天と地が1つであった頃天と地に切り裂いた者にしてあらゆる英雄達の原点の武器を持ち、ありとあらゆる財宝を集めた英雄達の王よ」

「ああ、それはあくまでも先祖の話だな。それで聞きたかろう？聞くが良い」

ギルはなおも上から目線で言い放った。

「まず貴方は……いえ貴方達は一体何者ですか？」

「貴方達？どういうことソーナ？」

「コカビエルとの戦闘の時に私達が結界を張っていました。そこに十数名の方が私達よりも強力な結界張りしました。彼らは女帝の命だと言っていました。それは貴方の仲間ですね？」

ソーナが質問をしてきたがリアスは貴方達という言葉に驚いていた。ソーナにリアスが聞くとソーナは質問に答えた。

「ほう、貴様は中々見所があるな……秩序コスモスルーラーの裁定者。それが妾わたしの組織。大規模な戦争は人間界にも害があるのでなその抑止力よ」

ギルはソーナの分析に少し評価した。

「コカビエルの目的もわかっていたと？」

「当たり前であろう。気付かぬ方がどうかしている。なあ雑種？」

ソーナの質問に答え嫌味のようにリアスに視線を向けた。

「な！」

「少なくともその雑種はそこまで視野にいれていたぞ？まあ、それでも魔王を呼ばなかったのに変わりはないがな」

「!?まるで見ていたかのようにいうのね」

ギルはリアスを見下すように言うどリアスは言った。

「見ていたかのようにではない見ていたのだ。貴様らは気付かなかつたようだがな」

呆れたようにリアスに返すと全員が驚いていた。

『な!?!』

リアス達はその後と幾つか質問をした。ギルは淡々と返した。

「……ところで雑種。イツセーを妾わたしの寄越せ」

「それはできないわ！」

ギルのどつてはこれが本題だった。リアスは即答した。

「ほう、それは妾わたしを敵に回すということか？渡す気があるのならば財をくれてやろう」

「それでも渡すことができないわ！」

「ぎ、ギル……待」

険悪そうな空気にイツセーが割って入ろうとするとギルは笑った。

「フハハハハハハ。最低限度は合格だ。それとイツセーをもし無下に扱えばただでは済まさんぞ？」

そして心まで貴様の物ではないと言うことを忘れるなよ?」

リアスに挑戦と忠告するかのよう^ににギルは言った。ギルはイツセーを見て

「イツセーよ。妾^{わたし}の全てをくれてやろう」

「え!?!」

視線が胸にいくとギルは笑った

「フハハハ。相変わらずよな・・・貴様だったら許そう」

「駄目よ!」

リアスが必死に阻止した。ギルは背を向け

「ではなイツセー。次会うときを楽しみしているぞ」

2

イツセーの初恋は黄金の髪の少女だった。一目惚れとおうものだった。少女はギルと名乗った。イツセーはギル一筋とはいかなかった。それはイツセーの夢ハーレム王というものだった。

イツセーは悪魔になる前天野夕麻という少女に告白された。

「兵藤一誠君好きです。付き合ってください」

正直嬉しかったがギルが一番好きだった。イツセーはギルを恋人にしてからギルに許可を貰えればハーレム王になりたいと思っていたイツセーは

「ごめん。他に好きな奴がいるんだ」

「そうなんだ・・・だったら死になさい!」

その時イツセーは死んだ。そのあとリアスにより転生悪魔となつてそれからの日々が一転した。アーシアを救ったり、リアスの縁談ぶち壊しライザーをぶつとぼしたりした。イツセーがなによりおどろいたのはギルが英雄女帝ギルガメツシュと名乗った時だった。

「はあ・・・ギルにいつ告白しようかな」

イツセーは自分の部屋で悩んでいた

第8話英雄女帝、墮天使総督と接触する

1

ギルの家は屋敷のようなどころである。本拠地のある場所にも寝室あるがこちらはプライベートでしか使わない。この場所の特定はそこまで時間がかからない。天道ギルでこの家は登録してある。勿論偽名だがギルはここに三大勢力の誰かが来ると見てわざと分かりやすい様にしてあった。本拠地へつながる物は全て移し終わっている。チャイムがなった。ドアを開けるとちよいワル系のおっさんがいた。

「よう。俺は神の子^グを見張る子^ゴの総督アザゼルだ。お前さんが英雄女帝ギルガメツシユか？」

「てつきり、妾^{わたし}のストーカーかと思ったわ。で、何のようだ？」

ギルの言ったストーカーと言う言葉にアザゼルは突っ込みをいれた。

「ストーカーじゃねーよ！・・・たつく。ようつてはわかってんだろ？・・・中で話しようぜ！」

「・・・図々しいやつ雑種よな。まあよい入れ」

ギルではなくアザゼルが中で話をしようと言った。ギルは呆れながら返した。墮天使の総督だけあつて欲望には忠実なようだ。

2

「良い酒をもつて来たぜ」

「貴様は妾^{わたし}の友かにかか？」

アザゼルの言葉にギルは突っ込みをいれた。

「別に俺はお前さんと戦いに来たわけでもねえからよ。それにわかってんだろ？俺が来たわけ」

「大体の予想はつく。あの雑種・・・コカビエルとか言ったか？あの雑種仕出かしたした事が切っ掛けで3種族会議をするのであろう？そこに妾^{わたし}を呼ぶのであろう」

「わかってんじやねーか。それで答えを聞こうか？」

アザゼルは真剣な顔で聞くとギルも答えた。ほぼ合っていた。ア

ザゼルの予想通りだった。

「別に構わんが一人連れていくぞ？」

「一人でいいのか？十人連れてきても良いんだぜ？」

「戯け。妾わたしの臣下を甘く見でないわ！」

アザゼルや他の勢力は護衛に大勢連れてくるほとんどは外で待機だがそれでも十人くらい連れてきてもおかしくはなかった。

「そうかい。それは失礼。んじゃあ話がついたことだし酒飲もうぜ！」

「自由か！貴様は！話が終わったらさっさと帰れ！」

アザゼルは飲んでから帰るつもりらしくギルを誘ったがギルは用がなければ帰れと言ったが気にした様子がなかった。

「かてえこというなよ？」

「つち・・・それが終わればさっさと帰れよ？」

ギルは舌打ちをし忠告した。

「受けとれ」

ギルはアザゼルに黄金の杯を投げた。アザゼルは受けとると持ってきた酒を注いだ。

「ふむ。悪くはない」

「そうか。それはよかったぜ」

ギルは一口のみ感想をいった。アザゼルもそれを聞くと一口飲んだ。

「が。王の酒には相応しくない」

「じゃあお前さんはこれ以上の酒を持っているのか？」

アザゼルの質問に対してギルはふざけるなど言うように返した。

「当たり前であろう。この場で出すのはよそう。魔王も来るのであるう？会談後にだそうではないか。場所は妾わたし自らが用意してやる。仮にも王と名乗るなら一度はのむがよい」

「そいつは楽しみだな。ミカエルのやつはどうすんだ？天使は酒はダメだったはずだぞ？」

「そうであったな。妾わたしが貯蔵する最高の飲み物を用意しよう」

この後酔れるまで飲んだアザゼルは案外面倒見が良いギルによつて神の子を見張る者に送られたのは別の話。

第9話会谈開始

1

会谈当日がやって来た。アザゼルから日時を知らされていた。アザゼルが酔いつぶれた後アザゼルのポケットに連絡先を入れておいたのだ。シエムハザという墮天使にアザゼルを渡すと謝罪された。それとギルは案外アザゼルを気に入っていた。

「それで禍雑種の団種に動きはあったか？」

「恐らく旧魔王派が仕掛けてくるかと」

「負け犬は負け犬らしく遠くから吠えていけば良いものを。身の程を知らぬとみた・・・行くでしょう」

ギルは報告を受けると旧魔王派を現魔王派よりも格下と評価した。

「いつてらしゃいませ女帝よ。香織でしたら準備はすでに整っているようです」

「わかった。分かっていると思うが禍雑種の団種には注意せよ」

「心得てます」

最後に忠告だけはして香織の元へ向かった。

2

三種族会谈は四勢力会谈へ名前が変わった。理由は1つギルが率いる秩序コスモスルーラーの裁定者の影響である。墮天使コカビエルを雑魚のように倒した女。しかも人間・・・更にはギルガメッシュの名前それだけで三大勢力が危機感を持つのは当然であった。

ギルが香織をつれ会谈場所に来るとすでに紅髪の魔王サーゼクス・ルシファーに魔法少女服の魔王セラフォル・レヴィアタンに加えアザゼルとアザゼルの後ろに立ってギルを見ている銀髪の少年ヴァーリー。

(悪魔・・・それも魔王クラスか。更には白いトカゲまで買っているか。面白い。イツセーと戦わせればイツセーも成長するであろう)

ヴァーリーを見てイツセーを高める雑種だとギルは評価した。イツセーは才能はないがそれでも近い未来イツセーは想像を絶する結果をだすと直感だがギルは思っていた。

黄金の翼を生やした男ミカエルと後ろにはイリナがいた。イツセー達も入室してきた。イツセーはギルがいることに驚いていた。「その疑問何れ分かる」

何か言おうとしたイツセーに予め言った。香織はイツセーに対しての柔らかい表情に驚いていた。

「君が秩序コスモスルーラーの裁定者のトップ英雄女帝ギルガメッシュだね？私はサーゼクス・ルシファア。四大魔王の一人を努めている。君の事は妹とアザゼルから聞いているよ」

「ほう。中々良い雑種だな貴様。超越者という奴か？貴様になら本気を見せても構わないと思えるぞ？」

サーゼクスから声をかけられたギルは思ったことを口にした。サーゼクスを称賛した。サーゼクスは優しげな表情でギルもサーゼクスを見て興が乗ったようだ。

「さて、全員が揃ったところで一つ。ここにいる者は、最重要禁則事項である『神の不在』を認知している」

サーゼクスの発言に誰も驚きを見せない。

「英雄女帝ギルガメッシュ。一先お礼を言わせてもらうよ。君のおかげで未来ある若手悪魔が、妹が救われた。魔王として、兄として、頭を下げさせてもらう。ありがとう」

「私からもお礼を」

「何。妾わたしのイツセーが真価を見せず殺されるのが癪だっただけよ。物のついでという奴だ。……だがアザゼル貴様の謝罪受けてやろう。心して謝罪せよでなければあの話は無しだ」

サーゼクスとミカエルがお礼を言ってきたがミカエルの言葉遮りギルは何でもないかのように言った。そしてギルはアザゼルに視線を向け鋭くさせ言った。あの話とは勿論酒である

「おい！そりやねーだろ！そいつが楽しみきてるつてのに！」

「雑種……死にたくば首を出せ妾わたし自ら殺してやる。光栄に思っ死ね」

アザゼルの言い分にギルはキレて本気で殺そうとしていた。背後から波紋が1つ現れていた。アザゼルもギルが本気だと分かると慌

てて取り繕った。

「じよ、冗談だ！すまなかった。いやすいませんでした!!」

「ふん。次はないぞ？わたし妾のお気に入りに入りしたからと言って付け上がるなよ?」

『あ、アザゼルが素直に謝った・・・だと・・・』

ギルが忠告をし魔王二人と天使長が声揃えて驚きを隠せなかった。アザゼルは心外だというように突っ込み入れた。

「おい！てめえらどういう意味だよ!」

『日頃の行いよ（ですよ）（だな）』

「何でギルガメッシュまで加わってんだよ!」

今度はギルが加わっていた。

「早く進めるぞ。アザゼルのせいで脱線してしまった故な」

『そうですね』

「お前ら仲良いだろ！打ち合わせしただろおお!?」

まるで打ち合わせしたかのようにだった。アザゼルが叫ぶ様に突っ込んでいた。

第10話 和平

1 「英雄女帝ギルガメッシュ。貴女いえ秩序貴女の裁定者達の目的は人間界の抑止力という事で間違いはないかな？」

「ああ間違いないぞ紅髪の魔王。故に戦争を起こそうとすれば妾わたしは遠慮なく貴様らとて殺すのでな。その時は覚悟せよ・・・だが、小規模なら見逃そう」

サーゼクスは確認するようにギルに聞くとギルは頷き肯定した。もしそれに反すれば種族が減ぶとサーゼクス達は感じた。

「分かった。流石に貴女を敵に回そうなどという愚かな選択はしない」

「私も同意見です」

「俺もだ」

「そうかなら・・・和平とやら結ぼうではないか」

サーゼクス達はギル達秩序コスモスルーラーの裁定者を敵には回したくないようだった。そして次のギルの言葉に全員が驚きを隠せなかった。

『!?』

「何を驚く？貴様らは初めからそのつもりで集まったのであろう？」

ギルは首をかしげ答えた。実際その通りだった。この会談は和平を結ぶつもりできている。ギルがそれに気がついていることに驚きを隠せなかったがアザゼルは肯定するかのようにつづった。

「そうだな。さっさと結んじまおうぜ」

アザゼルの言葉にもサーゼクスとミカエルを少し驚いていた。

2

「英雄女帝。貴方に1つ聞いておきたい。秩序コスモスルーラーの裁定者は多民族だと聞いている。何故種族を問わずに集め鍛えているのですか」

「妾わたしは見所がある者だけを集めているわけではない。あやつらはな・・・貴様らに迫害を受けた者達だ。中には元教会の者も吸血鬼も悪魔、ハーフ・・・あらゆる理由において貴様ら三種族だけではないがな。人間からの迫害を受けた者もおる。それらを見つけ次第保護

しているだけに過ぎん。後に妾わたくしの下につくかはあやつらが決めること……だがある程度の力がなくして生きてはいけぬだろう。故に力をつけてやるだけのこと」

ミカエルが質問するとギルは三人にトップを見て言った。迫害を受けた者という言葉に反応したものがいたがギルは気にしていなかった。ギルの言葉を聞きミカエル自身も耳が痛く、同時に何故それだけの種族がいながら組織が崩壊しなかったかが分かった。ギルの圧倒的なカリスマ性。王としての器。他者を導く魅力。どれをとってもギルが勝っていた。

「……分かりました……これが格の違いというものですか……長としての」

「フハハハハ。己の未熟さを知ったか天使長よ。貴様はどうあがいても聖書の神には慣れん。故に貴様は貴様よ。悩み、足掻き、葛藤せよ。貴様が貴様の道を見つけよ。だが見つけられるかは貴様次第……励むがよい」

ギルがミカエルを見透かしていることにミカエルは驚いていた。ミカエルは聖書の神の代わりにシステムを管理している。ミカエルも自身も聖書の神のようにと聖書の神のようであろうとしていた。しかし、それは叶わなかった。例えばジャンヌ・ダルクに声を届けたが彼女を救う事は叶わなかった。その結果ジル・ド・レエのような殺人鬼を生み出してしまった。

ギルの励みの言葉に少し救われたミカエルは更にギルの王として器を知った。

「はい。感謝しますよ英雄女帝……それにしてもアザゼル。和平に貴方が賛同とは驚きましたね」

「信用ねーな」

「当然だ。神器やその所有者……特に白龍皇を手中に収めた時は流石に肝を冷やした。また戦争をしようとするものだと思ったよ」

「……まあ神器に関しては若干俺の趣味が入っているんだけどよ。備えていたのさ。ギルガメッシュお前も分かっただろ？」

アザゼルはミカエルやサーゼクスの言葉を聞いて答えギルに視線

を向けた。

「禍あの雑種共の団か？・・・確かにトップがトップだ。妾わたしとて慢心を捨てる相手ゆえしよがあるまい」

「二人共分かつているようだが分かるように説明してくれないか？」

サーゼクスはギルが慢心を捨てるという言葉聞き緊張した様子で聞く。

「ああ。確かに俺は神器を集めていた。それは趣味の一環でもあるし、それに・・・ある存在を危惧してだ」

アザゼルの言葉からするとその存在の異常な存在であることが分かった。

「それはある組織でな、このことは俺達、墮天使サイドも少し前に露見した事実なんだが・・・特にその組織のトップがヤバイなんてものじゃない。マジで世界を滅ぼせるくらいの奴だ。そいつらに対抗するためにも、今は俺達は争うべきじゃねえ」

「・・・まあ我々天使側も和平を持ちこもうとは思っていましたが、まさかそんな事情があるとは思いませんでした」

「悪魔である我々も和平を望んでいる。だがアザゼル、君が危惧するほどの組織、そしてそのトップに君臨している存在を教えてほしい」

「その組織の名は——」

組織名を言おうとした瞬間時間が止まった。